

探訪記

下大野崎崎、八幡山、下城を巡るの記

時日 三月八日(土曜)午後二時より
集合 在何大橋(南表)
参加 高木、高野、佐藤、加藤、河野、
古田、羽柴、小野の会合(小)
十時 文男氏(大)馬(南小)
大南幸雄若鶴城高(南小)十名

先ず下大野崎崎の谷を歩くと、豊日阿彌社に参拜し、神殿に掲げられている、藤形の大まき龍踏連歌の歌歌が目をひく。この社殿のうしろが、石櫃が祭壇の柱という。ここから蛇窟にかけての堤防や道路による変り方はばばしい。且ての蛇窟橋の淵や入る姿と古い地図に照して求まる。変へ左まゝである。

地所では先ず山台庵に立寄る。ここは佐伯四回三番の札所、御寺堂は十二西観世音といふことだが戸帳の中ではつきり詳しぬ。御詠歌が縁の上にかかつてい

静かなる我がみなもと、祥師峰寺

うかふ、こころはコリコリはや舟

この庵の上には墓地がある。元禄時代の御寺の墓、数基の外は古い墓が立ち並んでいるが、再墓他(堤の上)に改葬したものが多く、ついでに古い墓の左墓が多い。丘の端に立つと、番匠川(坂田川)下流から佐伯市街一帯が一望され、すばらしいところである。

一行は自転車と違つて、山道(山道)を走る。堅田川の改修は、今(今)山岸(山岸)河段が盛みられているが、この山岸は既に完成、かなり高い堤防がついてい

川原の村家からと道も通つたが、格別なものもない。田圃道は一直線に私共と八幡山の裾に導く。

八幡社の急な高い石段を登つたら、拜殿に足用泉先生が待たうけて、熱いお茶とお菓子を下さり、ついでに、八幡社の由来、歴史に關する資料を示しつゝお茶として下さる。高保の碑立てられた馬居、天保年間建造の拜殿などより、私は今

も毎月欠かさず月次祭を守りつづけていられる先生、御奉仕の姿を羨し、見つらぬので、弘化七年八月十五日(鎌倉)云々の札を拜見し、相伝の遠山神社、石井の山伏宗家神社、社名のいわれを伺つたり、世々下安兵衛といふ宮大工のことなど、次から次へと話のつきやない。

私共は足田先生に心から謝意をこめて、社殿のうしろ、八幡山の古、岩跡を左づねる。頂上をめぐるには、樹林の中をそれと判じられる。切落し(切落し)の跡が見られる。樹令二百年位かと思われ、椎の老樹と交へての社叢は、見事である。

樹林を抜けて第一の空堀を渡り、尾根を辿り、歩いて、中世山城の防備一面がよくおかつた。山から下りて一行は下城(田圃)の山を、佐伯方面に立寄より、うしろ下城(田圃)から登坂されて、佐伯(佐伯)を見下して行く。高さが三、四程ほい、殆んど完形のこの土臺は、古代人が、焚火で、おたきしたものであつたかと思つてい

出た田舎生は、私共と下城(田圃)に、毎時降りて下り、教録所址や佐伯跡など市社と取る。この下城(田圃)は南に向つたゆるやかな傾斜地で、堅田(堅田)が遠く、広がり、寝場が祭壇とされては、日何境に、ひそめる場所、山まで、正面に望まれ、私は佐伯第二等の住宅地と見、古代人がここに住んだと、うなづけるというものである。

私達は中山は、田圃を通り、二つの小さな昔のトンネルを通つて、久野(久野)に出る。この道も歴史をもつ、時計は、お寺をまわり、少々疲れた。そこで佐伯(佐伯)公園に立寄ることは止して、解散した。(羽柴)

探訪記

白坪の墓地を巡るの記

時日 三月十日(土曜)午後三時から(臨時)

これは史学会としての表向の予定行事でなく、河野佐伯、羽柴の三人が、急ぎ思い立つたの、実行であつた。

白坪の墓地は、部族の集りにあり、河野(河野)が下見をして、いたところ、白坪(白坪)に、出かける。古い庵(庵)の跡らしい一角には、六地蔵が並んでいる。

矢野、古野と文書のある墓は、佐伯(佐伯)の、いかに、はつきりしない、すく横に、同姓新編、九屋の墓所がある。山吹家の墓である由、佐伯には、珍らしい、地蔵を、空崖(空崖)印塔を、正面に左右に、入りと、各種各様の墓塔が、並んでいる。「経王(経王)空崖(空崖)塔」とか、「大衆(大衆)空崖(空崖)塔」など、珍らしい。少し、空つたところ、に、立所(立所)明神(明神)の家(家)橋(橋)古家(古家)の墓(墓)せらへる。

三、四、安永(安永)八年、毛利(毛利)和泉守(和泉守)高(高)敏(敏)求(求)彼(彼)の、及び、の鳥居(鳥居)の、天(天)隔(隔)社(社)の前(前)を、経(経)て、祀(祀)魂(魂)所(所)に、祭(祭)拜(拜)、更(更)に、中野(中野)の、墓地(墓地)に、す(す)あり、今(今)泉(泉)元(元)節(節)の、墓(墓)也、且(且)見(見)水(水)家(家)の、墓(墓)也、云(云)椋(椋)墓(墓)の、群(群)など、と、見る。こ(こ)は、既に、私(私)は、数(数)度(度)に、お(お)つ(つ)て、い(い)る(る)。(佐)と、こ(こ)ろ。

案内、和歌(和歌)へ、平(平)田(田)幸(幸)市(市)氏(氏)厚(厚)は、つ(つ)いて、本誌(本誌)に、度(度)々(々)取(取)上(上)げ(げ)て、い(い)る(る)常(常)變(變)井(井)堤(堤)に、関(関)する(する)説(説)事(事)に、出(出)て、い(い)る(る)田(田)原(原)親(親)興(興)が、恐(恐)ろ(ろ)く、大(大)坂(坂)に、旅(旅)立(立)つ(つ)甲(甲)斐(斐)鶴(鶴)寺(寺)で、あ(あ)ら(ら)う(う)、と(と)り(り)交(交)し(し)左(左)和(和)歌(歌)で、平(平)田(田)顧(顧)問(問)入(入)念(念)の、庵(庵)に、在(在)る(る)もの、凡(凡)そ(そ)次(次)の(の)よう(よう)に、話(話)わ(わ)る(る)て、あ(あ)ら(ら)う(う)、と、先(先)日(日)二(二)人(人)で、読(読)んだ。由(由)此(此)正(正)と、を(を)う(う)。

今月の

折(折)じ、和歌(和歌)へ、平(平)田(田)幸(幸)市(市)氏(氏)厚(厚)は、つ(つ)いて、本誌(本誌)に、度(度)々(々)取(取)上(上)げ(げ)て、い(い)る(る)常(常)變(變)井(井)堤(堤)に、関(関)する(する)説(説)事(事)に、出(出)て、い(い)る(る)田(田)原(原)親(親)興(興)が、恐(恐)ろ(ろ)く、大(大)坂(坂)に、旅(旅)立(立)つ(つ)甲(甲)斐(斐)鶴(鶴)寺(寺)で、あ(あ)ら(ら)う(う)、と(と)り(り)交(交)し(し)左(左)和(和)歌(歌)で、平(平)田(田)顧(顧)問(問)入(入)念(念)の、庵(庵)に、在(在)る(る)もの、凡(凡)そ(そ)次(次)の(の)よう(よう)に、話(話)わ(わ)る(る)て、あ(あ)ら(ら)う(う)、と、先(先)日(日)二(二)人(人)で、読(読)んだ。由(由)此(此)正(正)と、を(を)う(う)。

別れの御歌の返し

出(出)逢(逢)と見(見)し、難(難)破(破)の、甘(甘)の、ふ(ふ)しの、ま(ま)の、ゆ(ゆ)め(め)に、ま(ま)さ(さ)ら(ら)ぬ、あ(あ)か(か)れ(れ)な(な)り(り)け(け)り

別路の露の言の葉、身にしみて

いとどかばかぬ、あかたもとかた

言の葉におもふこゝろ、乃(乃)ん(ん)ば(ば)一(一)き(き)せ(せ)ね(ね)ど

ち(ち)ら(ら)ぬ(ぬ)は(は)同(同)じ(じ)な(な)ら(ら)ぬ(ぬ)な(な)り(り)け(け)り